
K E M U ? R U ~ 助けたいもの ~

黄金 白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K E M U ? R U ～助けたいもの～

【Nコード】

N 9 9 1 7 M

【作者名】

黄金 白銀

【あらすじ】

平凡なる毎日に突如起きた人が行方不明になる怪事件。気づくと人間が跡形もなく消え去っている。この怪事件を解決しようと一人の女刑事が捜査に乗り出すが、彼女の1番大切な人物さえも消え去ってしまった…。『ウルトラQ』の中でも、かなりの話題となった作品『2020年の挑戦』を原作とした小説です…

Data・0 Welcome 事件の始まり

みなさん、こんにちは……

以前私が書いた小説『リトラ〜守りたいもの〜』ではお会いしませんでしたね…

このお話の作者で語り手の『こがねしろがね黄金白銀』です…

私は円谷プロダクションの特撮ドラマ『ウルトラQ』のファンで、それを原作として書きました…

このお話は私がウルトラQの中で最も好きなお話を原作とし、書いた小説です…

さて、これからこのお話を読むあなた…

あなたの心はあなたの体から離れ…

この摩訶不思議な世界へと入って行くのです…

西暦2010年 8月29日

ある夜…

事件はこの時に始まった…

グオオオオオオオオ！！

一機の沖縄発のジャンボジェット機が空を飛んで行く。中には大勢の人が乗っている。もうすぐで夏休みも終わり、楽しい旅行から帰ってくる人々だ。

「楽しかったね！沖縄！」

「また来たいね！」

「うん、そうだねえ。」

思い出もできて、みんなルンルン気分で帰ってきた。

だが、それはほんのひと時の事でした…

「こちら星川航空206便、着陸要請します！」
機長が空港に連絡を送る。

「了解、お氣をつけて…」

機長は連絡を終え、前方を見る。

「雲無し、風も快適、うん、事故など起こらない、良い天気だな…」
「そうっすね、先輩！」

機長のアシスタントである副機長は機長の後輩だ。

フアアアアアアアア

「ん？何だ、今の音は？」

機長は何かわからない不思議な音を聞いた。

「え？何も聞こえませんでしたか。」

「おかしいなあ？」

「幻聴じゃないんすか？…ああ！！」

副機長が何かを見つけた。

「どうした？」

「先輩！あれ！」

機長は副機長が指差すものを見る。

フアアアアアアアアアアアアアアアアアア

何と、怪しい光を放ちながら空を飛んで行く『謎の未確認飛行物体』がいたのだ。

「おい、こっちに来るぞ！緊急回避だ！」

機長が自動操縦のスイッチを切り、ハンドルを無理に動かして飛行機がかたむける。

「わあああ！」

「きやああ！」

乗客は転んでしまう。飛行機がかたむいたおかげで飛行物体との接触は避けたのだ。

「何？」

「いててて…」

乗客は起き上がる、飛行物体はこれいなくなった、というのは間違いだ。

フアアアアアアアアアアアアアアアアア

飛行物体はジャンボジェット機内の人に気づかれずに飛行機の真上

に行き、触手のようなものを伸ばし、飛行機に引っ付く。

シュパアアアアアン…

とつじよ、飛行機内の通路のど真ん中から怪光が現れ、そこから光る丸い物体がいくつも現れた。

「何だこれ!？」

「来るなああ!」

丸い物体は乗客やスチュワーデス、機長らにまわり付き、何かを見ているかのように飛んだ。丸い物体は機内を一回りし、ろっそくの火のように消えた。それと同時に飛行物体も離れていった。

「何だっただんだ?」

機長は不思議に思う。

次の瞬間…

パアアアアアアアン!

ジャンボジェット機が煙のように消えた…

無事だった乗客はゼロ…

何かが飛来しジャンボジェット機を消し去った、あなたはこの話を聞いて信じますか？

普通は信じません…

ですが、たしかに何かが、この地球にやって来たのです…

そしてジャンボジェット機を消してしまったのです…

人も消してしまったのです…

みなさんはそれを…

どう受け止めますか？…

さあ始まりますよ…

摩訶不思議な事件が…

摩訶不思議な物語が…

ようこそ、『ウルトラQ』の世界へ…

Data・i Start 姉妹の朝

西暦2010年 9月1日

日本 『黒白市』

この街の一丁目にある一つのマンションの一室に住んでいるのは仲良しの姉妹です。二人の両親は死んでしまい、姉が仕事をしながら妹の面倒をしています。姉は25歳、妹は14歳。

ピピピピピピピピピ！！

目覚まし時計の音が鳴り、姉が起きる。

「ん……グー……」

いや、二度寝してしまいました。

「お姉ちゃん！起きて！」

妹が起こしに来ました。

「……う……う……あとちょっとだけ……」

姉は寝ぼけている。妹はスウッと息を吸って……

「きゃあああああ！！助けてええええええ！！！」

と大声を出すと……

「は！妹の悲鳴！」

姉はやっと起きました。

「お姉ちゃん！」

妹は怒った顔で姉の顔を見る。

「あ、ああ、すまない。」

「起きた？」

姉は顔を洗って、朝ごはんの準備をする。今日の朝ごはんのメニューは食パンにキャベツとトマトのサラダ、そして牛乳だ。

「お姉ちゃん、マーガリン取って」

「はい。」

二人は仲良く朝ごはんを食べている。

両親は死んでしまった、けれど自分達はめげず、くじけず、がんばって、強く生きていこう、そう決めたのだから…

「（ニュースをお伝えします、昨夜テレビ局内で有名な料理家『林水羅^{いら}』さんが行方不明となりました、林さんは…」

テレビはニュースがついていて行方不明という悪いニュースが流れていた、行方不明となった林水羅さんは有名なシェフでジャンル関係なく数多くのメニューを生み出していることで有名です、そんな人が行方不明とは、命を狙われたのでしょうか？

「また行方不明、最近多いなあ…」

「お姉ちゃん、前の行方不明とか解決したの？」

「ああ、解決したよ、行方不明になった人が記憶喪失で…」

♪♪♪♪♪

突如音楽が鳴った、姉の携帯電話が鳴ったのだ。

「はい、もしもし……」

姉は携帯を取る。

「……はい……はい、わかりました……」

姉は携帯を切った。

「ゴメン、呼び出しが出た、すぐに行かなきゃならない……」

姉は急いで仕事に行く準備をする、服装はスーツだ。

「大丈夫、一人で学校行けるよ。」

妹は姉に向かってニコツと笑う。

「そうか、じゃあ気をつけていつてらっしゃい。」

姉は妹の額に軽くキスをする、そして家を出る。

姉妹の名前、ご説明が遅れましたが、姉の名前は『飯島栗姫』いいじま まろんと言います、黒白市にある『黒白警察署』の女刑事です、それで妹の名前は『飯島美甘』いいじま みかん、黒白中学校に通う二年生です。

「いつてきます!」

マロンはマンションから出て、自分のバイクに乗り、仕事場へ向かう。

「さてと、私も行こうかな!」

ミカンも学校へ行く準備をし、家を出る。

この姉妹の名前の漢字はむずかしいのでカタカナで言わせていただきます……

キキキキ！

マロンは呼ばれた場所に到着し、バイクから降りて仕事場に向かう。

ここは黒白市五丁目にあるスポーツバー、スポーツ観戦もでき、た
くさんのメニューから好きな飲み物が飲める良い所です。

ウイン…

ドアが開き、マロンが入る。

「お！来たか、クリ嬢！」

入っていきなり声をかけたのは黒白署の警部『黒田神太郎』、くろだかんたろう『ク
リ嬢』とはマロンのあだ名。黒田警部がつけたのだ。

「警部、また行方不明ですか？」

「いや、行方不明や失踪とは少し違うんだ。」

警部は現場を見せる。現場はいたって普通の窓際のテーブル。

「ここで何が起きたのですか？」

「このテーブルに座っていたスポーツ雑誌の記者『海野情』うみのじやうが行方
不明、というより突如消えてしまった、と言っても良いだろう…」

「え？… ということですか？」

「……話にくいのだが…」

ここに座っていた海野氏は先ほど取材したボクシングの記事をどう
書くか考えていたそうだ。

「ん？やはり『勝者！グレートボンバーマン！』ってでかく書こ
うかな！」

「お客さん、がんばってるねえ。これサービスだ！」

証言者である、このバーのマスターが気前良く海野氏にサービスとしてカクテルをサービスしたんだ。

「だけど、カクテル飲んでもなあ、良い案つかぶかなあ……」
しばらく座りこんでジツと考えていたそうだ、そしたら……

「あ！そうだ、これが良い！！うひゃああああ、これはイケる！！」
何か良いのが思い浮かんだらしく、次々と記事を書いていったそう
だ。

お、いい気になってきたなあ……これはまたサービスするかあ……

と、マスターは新しい酒を開けてグラスに入れたのだ、海野氏から
目を離れた瞬間だった。

「え？あれ？」

マスターがこのテーブルを見た時には海野氏の姿はどこにもなかった
そうだった。あつたのは海野氏が書いている途中である記事とペンと
手帳だけだった、記者がこれを置いてどこかへ行くのはありえない、
マスターが海野氏から目を離れたのはたったの10秒間、そんな短
期間で姿を消すことはできない、誘拐をすることも不可能だ。店の
中を搜索したが、やはり海野氏はどこにもいなかった……

「……ということだ。」

警部は当時の状況を説明した。

「たしかに妙ですね……」

「君はこれをどう思う……」

「……答えが出ません……」

「そこまで今回の事件は複雑だという事だ。」

ひとまず警察は退却した……

黒白署で今回の失踪事件での会議が行われた。

「……と、いうことであります。」

黒田警部もそこに参加していた、みんなそれぞれ事件解決の方法を考えたが結局何も出なかった。

「じつは、今回の事だけでなく他の場所でも同じような事件が起きていたんだ。」

と、突然とんでもない事を発言した黒田警部。

「それは本当ですか？」

マロンは問いかける。

「さっきの会議で知ったんだ、日本中だけでなく黒白市でもいたる所で起きていたんだ。」

「場所はどこですか？私が捜査してきます。」

「そうだな、頼むよ、飯島。これ、事件が起きた場所と被害者の資料。」

「ハ！」

マロンは資料をもらい、さっそうと出かける。

「せっかちなあ、クリのやつ。」

「いいんじゃない？あれはあれでいいことだし。」

「ですよねえ、クリ姉さん、仕事している時がかっこいいですし！」

マロンの同僚の刑事である、イケメンだがまぬけなところがあるゆかいな刑事『川井照夫』とマロンとは女性同士で仲が良い女刑事『船戸千尋』とマロンにあこがれている後輩刑事の『勅使川原幸之助』らである。

「警部、いいんですか？あいつにやらせて。あいつは妹の世話が…」
川井が警部に言う。

「妹さんの事なら大丈夫だ、妹さんはここ最近すっかり者になってきている、しばらく面倒見なくても大丈夫だよ。」

「それに、いざとなったらマンションの管理人が代わりに面倒見ってくれるし。」

「ハア、そうですか。」

それでも川井は心配のようだ。

「何、そう心配せんでもええじゃろ。」

声をかけたのはこの警察署のベテラン刑事としてみんなに慕われているシルバー『うちだもものり内田百則』である。

「おやつさん！」

おやつさんと呼ばれ慕われている百則。

「マロンちゃんの妹はええ年じゃ、姉がおらんでもイけるじゃろ。」

「そうですか？」

「そうなんじゃよ。」

百則は笑顔だ。

マロンはバイクに乗り、今までの被害者家族に話を聞きに行く。

ブロロロロロロ...

さて、みなさん...

もし自分の身近の人が消えてしまったら...

突如音も無く消えてしまったら…

あなたは警察や他の人に…

どう、説明しますか？…

Data・2 Picture Ⅱ 美術家の弟子

私は美術家です…

絵を描くのが仕事です…

春の絵… 町並みの絵…

人々の絵… 心の絵…

描く物すべてが私の絵…

そんなある日の事でした…

「絵が描けない…」

私は絶望におちいった…

突然筆が止まった、頭の中に今まで画かれていた『世界』が消えた…

消えてしまった…

頭の中から、消えてしまった…

どうしてだ…

わからない…

どうしてなんだ…

私の才能が… 自信が…

無くなってしまったのか…

この事は新聞や雑誌に書かれて世間中に広まった…

取材や質問に追いかまれてくる私…

とうとう落ちこんでしまった…

そんな私の所に一人の少年がやって来た…

『岩佐栄太』…
いわさ えいた

キツとした眼差しで私に向かって一言…

「俺を弟子にしてください！」

私はおどろいた…

私の事は世間に知らされているハズ…

「何故、私の弟子に？」

私はつい聞いてしまった…

すると、彼はこう答えた…

「親父を見返してやりたいんだ！」

ワケを聞くと…

彼の父親は、とある大きな会社の社長…私とは比べものにならないほどの大金持ちだ…だが、その父親はともひどい男で部下にきびしく叱りあげ、他の社員に恥をさらす、それだけでなく社員を平気でクビにして簡単に見捨てるらしい…それは息子である彼も例外じゃなかった…

「何だ！？この絵は！？」

栄太の父親『岩佐金成^{かねなり}』が息子『栄太』に怒鳴る。

「これは…その風景を描いたんです…」

栄太はおびえた声で金成に答える。

「こんな絵を描くヒマがあつたら勉強しろ！！」

金成は栄太の前で破く。

「あー！！」

栄太は目を見開く、せっかく自分が描いた絵を破かれたのだから。

「何だ？くやしいか？」

金成は栄太を見下す。

「こんな絵なんかで会社は支えられん！わかつてるのか！？まったく。」

金成は栄太から振り向き、去ろうとしたその時だ。

「このカス！」

金成に向かつて栄太が悪口を言った。

「何だとおお……」

怒り狂った眼で息子を見る金成。
まなこ

「カスにカスと言って何が悪い？カス？」

「キサマゝ親に向かつて何て口の聞き方をお……！」

金成は栄太の胸倉を掴む。

「カスじゃなかったらゴミか、このハゲ頭……！」

ドガッ！

栄太は父親の顔を殴った。

「ぐはああ……！」

金成の口から血が出る。

「どうだ！痛えだろ！同じ人間なんだ！当たり前だろ！バーカ……！」

「うるせえ！このどら息子！おまえのようなガキはな、この世からいなくなっちまうんだ……！」

「消えるのはおまえだろ！クソツたれ！」

「んだとお……！」

そうやって、ケンカは続き、俺は家を飛び出した……

事情はよくわかったがケンカはいけないなあ、と私は言ったが彼は……

「あいつからケンカを売ってきた、だからあいつが悪い。」

実父を『あいつ』呼ばわりとは、相当嫌いなんだな、お父さんの事…

「けれど、何で私を師に持とうとしたんだ…私は新聞などで報道されている通り才能が尽きてしまつて…」

と私は言った、ハッキリと、事実を発言した、だが彼はこう言い返した…

「あなたは、俺が画家になるきつかけとなつた人だから！」

彼の、栄太君の話によれば私の絵を母が連れて行ってくれた美術館で鑑賞したらしい。その時に、すばらしい絵だ、こんな絵をいつか自分も描いてみたい！と決意し、憧れの絵を描いた私の下で絵の勉強をしたいと言う。私はそこまで親しまれる人間だったのだろう、私はちよっぴりうれしかった…

それ以来、彼は住み込みで私の弟子となつた、私は才能は無くしたが人に絵を教えるという事はできた、栄太君は私の初めての、大1号の生徒なのです…

「先生、ここはどう手を動かせばいいんですか？」

「先生、どうですか！？」

「先生、これは失敗してしまいました…」

先生、先生と何度も尋ねる生徒。これがやかましいと思う人もいる

ようですが私にとっては何故かうれしいのです…これが先生になるという喜び、うれしさなのでしょうか…

そう言った日々が何日も続き、栄太君が『黒白市絵画コンテスト』に自分の作品を出展したのです、すると彼は1等賞を取ったのです、我が弟子ながらすごいと思いましたよ…

これで父親を見返せるな、と私は栄太君に言いました、すると彼は…

「…もう親父を見返すなんてのはどうでもいい、俺は、みんなに見てもらえる、すばらしい絵を描き続けたいんだ！これから、ずっと！」

やっと気づいた、絵は見返すための道具じゃない、人々に絵を見てもらって、その人その人に笑顔を贈る、それが画家なんだ…

彼は更なる絵を描き始めた、私はまだ彼に絵を教え続けている…

そんな、ある日の事だ…

朝、彼を起こし朝ご飯を食べさせて作画室に入って行くのを見送り、私は彼のために紅茶を持って行った、その時だった…

部屋に入ると、彼は居なかった…

「…以上が私が知る岩佐栄太君に関する事です。」

「どこかに出かけたという事はないのですね。」

「はい、彼は私に一言言ってから外出をしますから間違いありません。」

事情聴取をしているのはマロンだ。

「まさか、彼の父親が彼を連れ去ったのではないかと警察に話して捜査してもらったのですが…」

「岩佐栄太さんは父親である岩佐金成氏のもとには居なかった…」

「はい、警察が事情聴取を取ったり、家宅捜査をも行ったらしいのですが、彼は発見されませんでした…」

先生はがっかりした。

「彼は、栄太君はどこに行ってしまったのやら…」

先生は泣き出しそうな顔をしている。

岩佐栄太は先生に言ってから外出する、だが言わずにいない、家出でもないようだ、岩佐栄太がいた作画室から誘拐といても彼は血の気の多い性格だ、誘拐されるとなれば抵抗はするししたのならば周りの物が壊れていてもいいハズ、彼に抵抗もせず瞬時に誘拐できる方法なんてあるのか…

美術、それは人の心を表現した物…

みなさんはこれができるハズです…

なぜなら、それは人に与えられた特権だからです…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9917m/>

K E M U ? R U ~ 助けたいもの ~

2011年10月9日23時25分発行